自立活動グループ④

不適切な行動の目立つ生徒へのアプローチ
～応用行動分析に基づいて～

堀井和子

1．はじめに

中学部２年のＹ子は、人を叩く、蹴る、つねるなど不適切な行動の目立つ生徒である。これらの行動は、人とのかかわりの中で起こり、強められ、繰り返されてきた。ことばの未熟なＹ子にとって、不適切行動それ自体が効果的なコミュニケーションの手段になっているのではないかと思われる。

山本（2003）は応用行動分析の視点から「問題行動にコミュニケーション要素が含まれる場合には、問題行動そのものを減少させるのではなく、その問題行動と同じ働きを持つ適切なコミュニケーション行動を指導し、増やしていくことが最も有効な手段である。」と述べている。そこで、本研究では応用行動分析に基づき、不適切行動を無理に取り去ろうとするのではなく、適切な行動がとれるよう支援し、よりよいコミュニケーションを築いていくことを目的とする。

2．対象生徒

Ｙ子（中学部２年）

（１）検査結果

KIDS　総合発達年齢　2:9（H15年６月４日）

運動3:1　操作1:10　理解3:0　表出2:3　概念1:10

対子ども2:0　対成人2:4　しつけ4:3　食事3:0

（２）実態

・教師や友だちに自分から積極的にかかわっていく。しかし、かかわり方が不適切であり、以下の様な問題行動が頻発して見られる。

叩く、蹴る、押す、つねる、足を踏む、お尻をさわる、顔や服をなめる、大声で「アホ」と叫ぶ、ギューッと抱きつき頭突きする、など

・興奮したり、緊張が高まったりするときにも、問題行動が頻発する。

・友だちの世話や教師の手伝いを積極的にしてくれる、素直で優しい一面もある。

・発音はやや不明瞭だが、教師や友だちのことばをよく真似る。

・力加減がうまくできず、立ち居振る舞いが粗雑で乱暴な印象を与えることがある。

（３）保護者の願い

・人を叩いたり蹴ったりすることを減らしてほしい。

・ことばを増やしていってほしい。

3．コミュニケーション機能の分析

Ｙ子はなぜ不適切行動を起こすのか。まず、それを知ることから始めようと、動機づけアセスメント尺度（MAS）を使って調べてみた。その評定結果は以下の通りである。

感覚の獲得1.75　逃避の獲得2.5　注目の獲得5.75　事物の獲得1.0

→優先的な機能は「注目の獲得」と推定される

Ｙ子は、叩く、蹴るなどの不適切行動をとることによって、周囲の注目を得ている可能性が高いと言える。

次にＹ子が不適切行動を起こしやすい場面と起こしにくい場面において、不適切行動の前後の状況を観察してみると、以下のことが見えてきた。

・廊下を通りすがる人に叩いたり蹴ったりする時は、相手が「痛い！」「やめて！」「きゃー！」などと反応する様子を楽しんでいるようだ。反応が大げさな人にほど不適切行動を起こす頻度が高い。

・教室内では、教師が他の生徒にかかわっている時ほど、その教師に対して不適切行動を起こす。それでも教師が他の生徒に気を取られている場合、今度はその生徒に対して不適切行動を起こすこともある。

・興奮したり緊張が高まったりしている時も不適切行動が出やすく、叩く、蹴る等の他に、教師にギューッと抱きつき頭突きする行動が見られる。

・授業中など、課題が与えられ自分の力でできる時は、不適切行動が出にくい。課題に集中している時はほとんど出ない。

つまり、Ｙ子の行動に反応してくれる人（主に教師）にかかわってほしい時に不適切行動を起こすことがわかった。

4．支援計画

（1）目標

図１のように、不適切行動を起こさなくても教師のかかわりや注目を確実に得ることができるよう、「よりよいコミュニケーションを強化する」ことを目標とした。

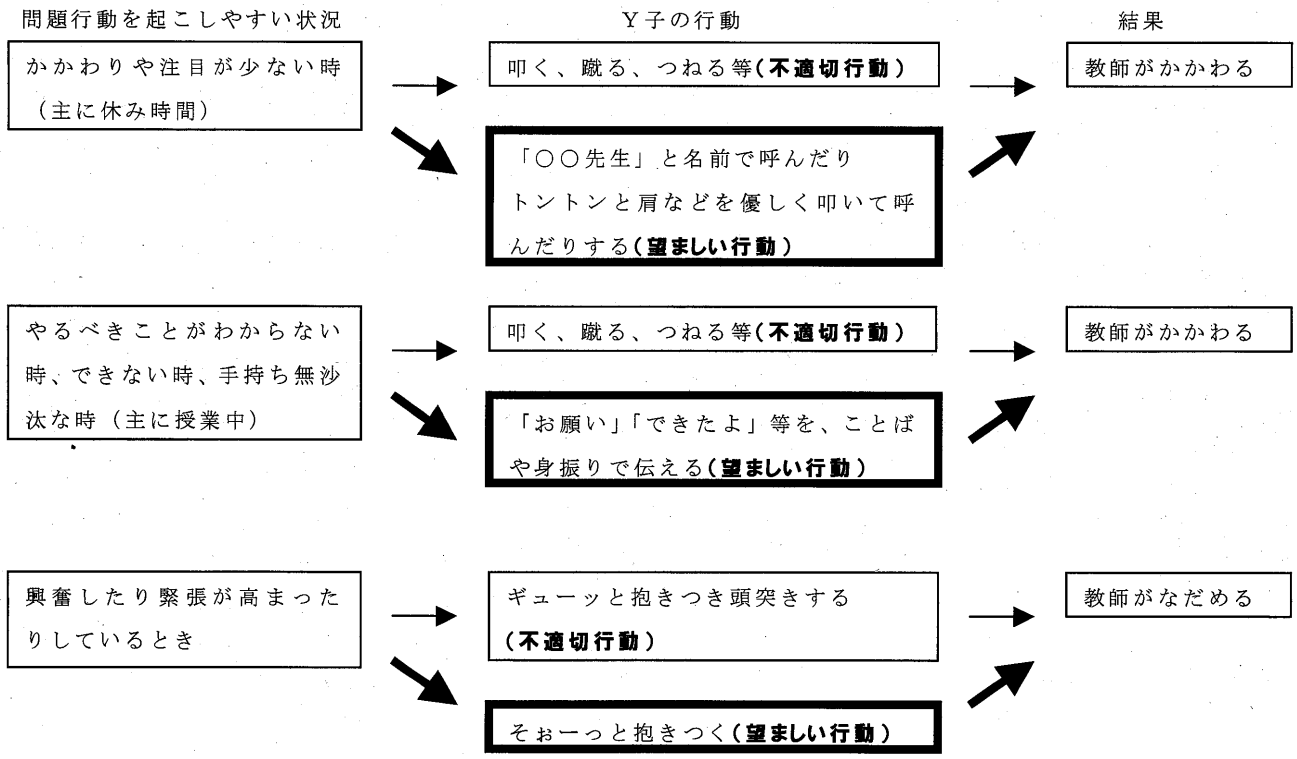

図１　不適切行動に対する機能的コミュニケーション訓練

（２）手だて

・不適切行動には反応しないようにする。
・Ｙ子にこまめに声かけをする。
・望ましい行動のモデルを示す。
・Ｙ子の望ましい行動は興奮させない程度に小声でほめ、できたときは握手や拍手の手続きをとる。

５．支援の実際

（１）不適切行動への無反応とこまめな声かけ

５月中頃より、担任二人（担任Ｊ：男性、担任Ｋ：著者）で、特に叩く、蹴るなど攻撃的な不適切行動には極力反応しないように心がけ、こちらからの声かけをこまめに行うようにした。特に、他の生徒にかかわっているときには声だけでもかけることによって、Ｙ子のことも気にかけているのだということを知らせた。すると、Ｙ子は叩いたり蹴ったりしても何の反応も得られない経験を繰り返し、また、不適切行動を起こす前にかかわってもらえる経験を繰り返すうちに、６月には担任二人に対する攻撃的な行動が格段に少なくなった。改善の手ごたえを得たので、６月の職員会議で全校の教員へも共通理解を図り、不適切行動には反応しないでほしいこと、どんどんＹ子にかかわってあげてほしいことをお願いした。

（２）望ましい行動モデルの提示

もともとＹ子は教師や友だちのことばをよく真似る行動が見られたので、それを生かして音声言語のモデルを示すようにした。それと同時に、不明瞭な発音を補うため身振りモデルも示すようにした。具体的には、教師の注目を獲得したい場面では、「○○先生」と名前で呼んだり、トントンと肩などを優しく叩いたりした。また、やるべきことがわからない時やできない時には「お願いします」と、その場に応じた会話モデルをことばと身振り（両手を合わせる）で示すようにした。すると、Ｙ子は案の定すぐにことばや身振りを真似たが、必要な場面で自発的に使えるようになるには、継続した支援が必要であった。２学期に入って、少しずつ自発的に使う場面も出てきた。

Ｙ子の不適切行動の中でも最も改善の難しかったものは、ギューッと抱きつき頭突きする行動であった。これは興奮したり緊張が高まったりしている時に見られるので、抱きつく行動自体を拒否しては情緒の安定が得られないと思われたが、力のコントロールの難しいＹ子に適度な力加減を伝える方法はなかなか見つからなかった。ところが、９月上旬に著者がぎっくり腰になり一週間以上休むという出来事があって以来、Ｙ子はそぉーっと抱きつくことができるようになったのである。ひそひそ声で「そぉーっと」と言うと、より一層その意味が伝わるようであった。

（３）望ましい行動の強化

Ｙ子の望ましい行動は、すぐその場でほめるようにした。その際、大げさにほめるとＹ子が興奮して逆効果なので、小声でほめるよう心がけた。同時に、ほめる際には握手を試みたが、これはＹ子にとってはあまり魅力的ではなく、どうしてもギューッと抱きついてきてしまった。そこで、音が出ない程度の拍手に「できたねー」と音声言語を添えてほめるようにしたら、Ｙ子も喜んで真似をしたので、次第にこのほめ方が定着した。この方法は、その後Ｙ子の「できた」のサイン形成につながっていった。

6．結果と考察

支援の効果を評価するため、以下の２つの場面におけるかかわりの変化を見てみた。

（１）担任Ｊとの遊び場面におけるかかわりの変化

６月、10月、12月の３回遊び場面のビデオを撮り、それぞれからＹ子と担任Ｊがかかわっている任意の４分間を抽出し、その中で見られた担任Ｊに対するＹ子の不適切行動と望ましい行動の数をカウントした。

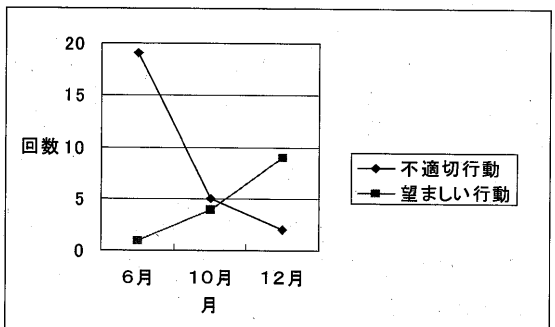

図２　担任Ｊに対するＹ子の行動

望ましい行動としてカウントしたもの
・トントンと優しく腕を叩いて呼ぶ
・そぉーっと抱きつく
・先生の名前を呼ぶ

不適切行動が減り、望ましい行動が増え、その数が逆転していることから、支援の効果が現れていると思われる。

（２）担任Ｋとの着替え場面におけるかかわりの変化

９月～12月の４ヶ月間、朝の着替え指導中に見られた担任Ｋに対するＹ子の不適切行動と望ましい行動の数をカウントし、１ヶ月ごとに平均値を出した。

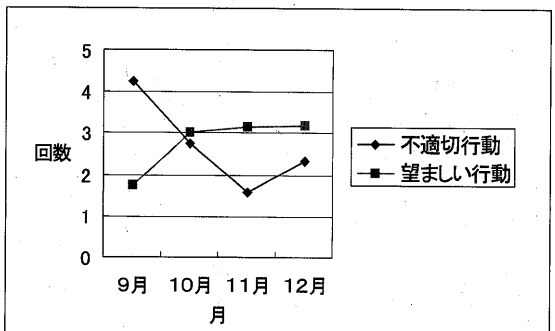

図３　担任Ｋに対するＹ子の行動

望ましい行動としてカウントしたもの
・トントンと優しく腕を叩いて呼ぶ
・音声言語「お願いします」
・「お願い」の身振りサイン（両手を合わせる）
・物を指し示してお願いする
・そぉーっと抱きつく

不適切行動が減り、望ましい行動が増え、その数が逆転していることから、支援の効果が現れていると思われる。

7．おわりに

Ｙ子の不適切行動を無理に取り去ろうとするのではなく、望ましい行動を育てようとしたことにより、結果として不適切行動が軽減された。その過程において、担任同士で話し合ったり全校の教員に共通理解を図ったりできたことは大変有意義であった。他の教員のＹ子へのかかわり方がヒントになることも多々あり、自分自身の勉強にもなった。しかし、不適切行動が完全になくなったわけではないので、今後も支援を続けていきたい。

＜参考文献＞

・藤原義博、平澤紀子（2001）「行動問題の理解と包括的な支援」
実践障害児教育2001年４月号～2002年３月号
・山本淳一（2003）「コミュニケーション能力を高める―応用行動分析の視点から」
発達協会コミュニケーション・セミナー